

教えの庭から

健康であり、自分の仕事に満足し、お金があり、人間関係が円満であることなどの条件が整えばきつと幸せなはずだと思われます。しかし、こうした幸せを全部台無しにしてしまう出来事が一つだけあります。それは「死」です。死んでしまえば、この人生の幸せがすべて奪われてしまいます。だから私たちは死を何よりも恐れて、普段なるべく自分の死をあまり考えようとしません。

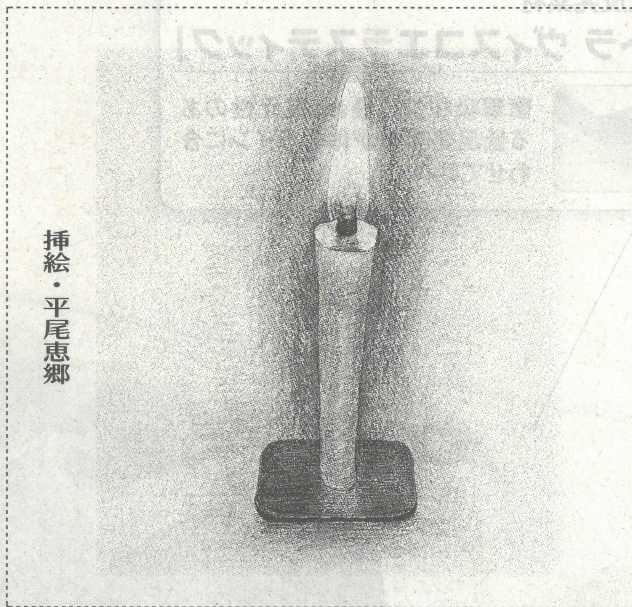
仏教では、そもそも私たちが幸せの条件だと思っているものは、借り物の幸せであって本当の幸せではないと言います。しかし、人間はそうした借り物の幸せに夢中になってしまいがち

幸せはどこから

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

です。こうした幸せにとらわれて、こだわっている限りは、人間は本当には幸せになれません。本当の幸せはいつたどこにあるでしょうか。

「自灯明・法灯明」とは、他を頼りにすることなく自己を灯明の明かりとして進み、正しい法を灯明の明かりとして進みなさい」という事です。換言すれば、「自



挿絵・平尾恵郷

お釈迦様は亡くなる前、弟子たちが「今後、わたしたちはどのように生きていけばいいのでしょうか」と尋ねた時に、「自灯明・法灯明」と教えられました。

「中」にあると言えます。その心の中にある本当の幸せに気付くためには、自分の死と向き合い、死を受け入れることが大事になってくるようです。

「自灯明・法灯明」とは、他を頼りにすることなく自己を灯明の明かりとして進み、正しい法を灯明の明かりとして進みなさい」という事です。換言すれば、「自

本当に死を受け入れた人の言葉は、感動的です。その例が、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』（井村和清著、祥伝社）に載っています。医者だった井村さんが肺癌に侵され、死を悟った後に見えてくる光景を語っています。

「レントゲン室を出ると、私は決心していました。歩けるところまで歩いていこう。その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとても明るいのです。スーパ―へ来る買い物客が輝いて見える。走り回る子供たちが輝いて見える。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが、輝いて見えるのです。アパ

分こそ自分の寄辺であり、正しい法によって、よく整えられた自分が真の寄辺である」となります。だから、本当の幸せは、「法に依って整えられた自分の心の

自分の死を見つめることは、自分の命を見つめることになり、それを禅では「正事究明」と言います。これは、仏教徒にとって一番大切なことです。ところで、「命を見つめる」と言っても、なかなかお経を毎日読む生活から可能になります。お経の中で特に般若心経には、大きな効用があります。幸せは、日々の読経生活から来ま